

でもその雰囲気味わってもらいたいと発案されたものだ。その他にも「教義研修会」の開催、「子どものコーラス隊」や鼓笛OBの「シニアバンド」の結成、「子どものおつとめまなび」の企画など、信仰が次の世代につながっていくための活動に力を入れた。

また、教会活動の物理的な側面を考え、収益活動にも着手。教会や布教所の空き地スペースを利用して「パーキング」や「貸しテナント」「農園」などを行い、その活動から得た利益を教会の活動資金に充てていく仕組みを整えていった。布教のさらなる展開にも専心し、積極的に地方都市に布教拠点を誕生させた。キンボモやキンカラ、ドリジー、ニアング、ムボチなど、これまで天理教が知られていなかった場所に講社を開き、その責任者を教会から任命するという仕組みを構築していった。責任者は教義研修会を修了したものから選ばれるという、研修会と連動した動きでもあった。さらには、今日700人以上の児童や生徒が集まる「天理総合教育施設」は、社会に閉ざしていたという天理教のイメージを払拭するだけでなく、教育行政が十分でないコンゴ社会において人材育成にも寄与し、先生や保育士、給食係など学校運営に関わる多くの雇用も創出している。

こうした活動を推進していくなかで常に問題となったのが、「教会」(Eglise)の捉え方だった。とくに、現地で考える「Eglise」のあり方と、本部から見る「教会」のあり方には、大きな隔たりがあると感じていた。このことは彼との話のなかで何度もでてきた話題だった。この点に関して、彼は常に現地と本部との「板挟み」の状態だったと言えるだろう。本部からの指示と現地教信者の思いには時として大きな隔たりがあり、その狭間で彼は幾度も苦悩していた。私はこの種の話し合いを彼と何度もした。時には理解してもらえることもあったが、時には話が平行線が終わることもあった。「そのことは日本人の口からコンゴ人信者に対して直接言ってもらいたい」という場面がしばしばあったが、それはその彼の微妙な立場を物語っていた。

コンゴブラザビル教会は、教会本部の直属教会(大教会、伝道庁、教会本部が特に認めた分教会、および教会本部が特に承認した海外の教会)である。したがって、教会本部から見ればその運営のための助成金を出す特別な存在かもしれないが、それでも全世界に17,000カ所ある教会の一つであることには違いない。少しニュアンスを加えて言うなら「一つの教会でしかない」のである。そして彼は「一教会長」なのである。しかし、「コンゴブラザビル教会」しか天理教の拠点がなくコンゴでは、教会は天理教を「代表」する機関と見なされ、その会長はコンゴにおける「TENRIKYO」の「代表者」となる。したがって、コンゴではさまざまな場面で、「世界に布教を展開する一宗教の代表者」というイメージが彼に投げかけられたのである。

その背景として、日本と異なりコンゴでは、宗教が社会のなかで重要な地位にあることが指摘できるだろう。また、天理教が国の公認宗教となっていることも影響している。実際、国家行事に宗教団体が参加する機会が多い。「一教会長」である彼も、国家的行事に招待され、時には大統領や大臣と面会する機会もあった。またカトリックやイスラムの代表者とも議論する場もあった。参加は義務ではなかったが、コンゴの社会に天理教を広めようと願っ

ていた彼は、そうした機会に積極的に参加したのである。教会で行う行事にも政府関係者や他宗教の代表を招くこともあった。彼はコンゴにおいて「TENRIKYO」のイメージを常に背負っていたのである。

彼には教会復興時から一緒に行動を共にした青年が数名いた。彼にとって一番大変なときに一緒にいてくれた同志であった。ただ、そのなかには何もできず「教会に必要なのか?」と周囲から指摘されるような人もいた。しかしピエール氏は、信者が増え教会の運営体制が変わっても、彼らを見放すことは決してなかった。彼らに何かできる役を与え、少しでも教会に尽せるように導いていった。

本年10月、ピエール会長出直しの報を受け、コロナ禍にもかかわらず、教会本部は海外部から2名と私の3名を葬儀のために派遣した。葬儀は10月16日(土)に行われた。出直してから2週間以上も経っていたが、おちばから派遣される3人の到着を待っていたことだった。彼の葬儀はヨーロッパ・アフリカ課長が祭主となって執り行われた。コンゴにおける天理教の代表の葬儀が、本部から送られてきた代表によって執行されたことで、故人だけでなくコンゴにおける「TENRIKYO」の面目は保たれた。正確な数は把握できないが、葬儀には400~500人の参列者が集まった。葬儀までの半月の間は、毎夜通夜が行われ、連夜多くの人が会長宅の前で夜を過ごした。

葬儀の翌日、現地の習慣として「葬儀が終わるまで触れてはいけない」とされた故人に関わる部屋に入り、所有物や書類などの確認作業を家族や親族の代表、また教会関係者などの立会の下で行われた。家族といえども勝手に入ることは許されないようだ。会長の事務所は私が鍵を開けた。室内は彼が出直す前のままの状態だった。雨期にもかかわらず雨があまり降っていなかったこともあり、椅子や机、本棚などには細かい砂埃がうすうす積もっていた。会長の机の上には、3万コンゴフランと小銭が無造作に置かれていた。お金に関しては慎重な彼なら、決してしなかったようなことだ。おそらく、すぐ戻るつもりで事務所を離れたのだろう。もちろん、自分が再び戻って来られなくなるとは決して思っていなかったに違いない。彼の出直しが本当に突然の出来事だったことが実感された。

コンゴ人として、自国のコンゴ文化に誇りを持っていた彼は、よくコンゴの風習や習慣、食べ物、音楽について教えてくれた。車のなかで教会のコーラス隊の曲をかけることが多かったが、流行の曲もよく聴いていた。コンゴ特有の食べ物も教えてもらったが、それを押しつけるようなことは決してしなかった。習慣の違いを常に理解し、尊重していた。むしろ逆に、彼の方がさまざまな日本食を口にしなければならぬ局面があったようだ。その影響でいろんなものを食べるようになり、日本で食べられないものはないと言っていた。そんな彼が生前唯一できなかったのが、銭湯に入ることだった。人前で裸になるのは、通常コンゴでは考えられない。しかし、天理大学に進学した彼の息子が銭湯に行くと聞き、いよいよ自分も行くことを決心し、次回のおちばがえり際には私と銭湯に行くことを約束をした。2年前のおちばがえりのことだったが、それ以来、コロナ禍により彼はおちばがえりする機会がなかった。彼との約束は果たせないままになった。